
忘れられた者たち

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられた者たち

【Nコード】

N9016U

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

人には見えぬモノを見、聞こえぬモノを聞く少年は、いつしか己のなすべき事を知る。 ■ 和風小説企画参加作品 ■

犬

稲の収穫を待つてか、山向こうで戦が始まっていた。冬を呼ぶかのように、風が哀しげに声をあげながら、山間にある農村で吹き巻いている。

風は強く、冬になつても雪深くなる事はないが、年貢や相次ぐ戦による徴収の厳しさに人々の顔は暗くなる一方だった。

しかし苦しい境遇にもかかわらず、子供たちは、声を上げて戦の真似事をし、駆け回っている。

時折上がる甲高い笑い声に、戦禍を被らないかと心配しながらも、大人たちは、少しばかり表情を和らげた。

村はずれにある、朽ちかけ、傾いている小さな木造家屋に、五郎が勢い良く引き戸を開け、駆け込んだ。

「母ちゃん！」

土間から居間に繋がる障子を、開け放つ。

顔を寄せ合い、話をしていた両親は、はつとして五郎を見た。

「どうしたの？ 母ちゃん、顔色悪いけど」

「なんでもないのよ。それより、なにか用事があつたんじゃないの？」

二人が無理に笑顔を作るのを、五郎は見逃さなかった。

前にも、似たような事があつた気がする。二つ上のさち姉が、質の良い着物を身につけた男に、連れて行かれる前に似ている。さち姉は、気丈に振る舞い笑つて出て行き、今では便りも途絶えてしまつていた。

ひよつとして、一つ上のゆき姉も？ それとも、行商に行つた一郎兄と三郎兄の身になにか——しかし、そんな事を聞ける雰囲気でもない。二人とも、聞く事を許さない空気をまとっていた。

「あのさ、山でどんぐり拾つてきたんだ」

気付かないふりをして、当初の用事を言うにとどまった。

あきらかに安堵を見せた母親は、風呂敷一杯のどんぐりを見て、喜んだ。

「助かるわ。カゴに入れて、水にさらしてきて？」

「うん、わかった」

土間の隅に置かれている、竹で編まれた小さなカゴに移す。

飲み水に使っている大きな甕^{かめ}には目もくれず、カゴを抱えて外に飛び出した。

「五郎、どこに行くんだ」

兄の二郎が、彼の背丈ほどもある藁^{わら}の束を背に担ぎ、前から駆けて来る五郎に声をかけてくる。

「二郎兄ちゃん！ どんぐり拾ってきたんだ。川にさらしてこようと思って」

「そんなもん、村の井戸で……ああ、そうか。まあいいや、こいつ家に置いてくるから、一緒に行こうか？」

「ううん、大丈夫」

「だけど、村の奴らがまだ外にいるぜ？」

「平気。ついでに先生の所にも寄ってこようかと思ってるし」

「まあ、気をつけるよ」

難しい顔をして、しかしうなずいて見せる二郎に、五郎は笑顔で返した。

兄と別れ少し行けば、川に出る。山に近いため急流ではあるが、場所によつては流れがゆるく溜まっているように見える場所もある。川辺に続く獣道をくんだり、目星をつけていた場所に、大きめの石でカゴを囲み、万が一流れていくのを防いでおく。

「よし！」

秋口だが凍てつくような水から手を上げ、枯れ草で手を拭くと、指先に息を吹きかけた。

その時、枯れ草が風で吹かれたものとは違う動きをした。

五郎は、全身鳥肌で覆われるのを感じたが、おかしい動きを繰り返しながら近づいてくるモノから、目を離せずにいた。頭の中では

逃げなくてはと思うのに、身体がいう事をきかない。

ほとんど手を伸ばせば届く位置まで、薄茶色の枯れ草が揺れる。

「……誰？」

やつのことで、それだけ声を発する事に成功した。

「これ！ 少しは言う事を聞いたらどうじゃ」

小さくとも、はつきりと聞こえる老人の声に、五郎はしまったと顔をしかめた。

草をかき分けて出てきたのは、藁をねじり合わせた細い縄を、黒く短い口でくわえ、頭を振っている茶色の子犬だった。

「……犬？」

だが、よく見れば不自然に縄の端が引つ張られている。首元に、辛子色の衣をまとい、烏帽子をかぶった小さな翁が、手綱よろしく縄を握っていた。

嫌な予感しか、しなかった。見なかったふりをしようとも思ったが、子犬は縄をくわえたまま、温かな頭を五郎のすねに押し当ててくる。

秋とはいえ、空気は冷たさを増しており、今来ている膝丈の薄い着物では肌寒くなってきていた。

じんわりと移ってくる体温に、五郎は思わず笑顔になった。

「縄を、はずしてやろうか」

そう声をかけ、頭をなでてやろうとすると、厳しい声が犬の背から飛んできた。

「儂の馬に、触るでない！」

「……口、痛いだろう。今、はずしてやるからな」

「ええい、触るなど言うのに！ 災厄をもたらされたいか、小僧」

さすがに五郎が顔を上げて、小さな馬にされている子犬の背中に目をやった。

「こんなにも嫌がつてるのに。悪さをする奴が一番災厄を受けるべきだ」

「……うん？ なんじゃ、おまえ。儂が見えるのか」

「あ、今のなし！ 大変だ。今はずしてやるからな」

口に引つかかっている縄をはずしてやると、子犬は五郎の赤くなつた小さな手に咬みついてきた。

痛みとともに感じた、子犬の口の温かさに複雑な気持ちになった。「おまえ！ 助けてやったのに……でも、あつたかい。けど、痛い」子犬の口から手を避難させると、目の前に落ちてきた縄に、子犬はまた咬みついた。

そして、見計らつたように縄が引かれる。

「そうか。おまえが五郎か、やせっぽちじゃの」

楽しげな声したが、五郎は聞こえないふりをして立ち上がった。横目で力ゴの状態を見てから、獣道を駆けあがる。

振り返らないように気をつけて、五郎は家とは反対の方向に足を向けた。

地面の土を見るように視線を落としながら、五郎は口を固く結んだ。

他の人間には見えないようなモノが、見える。

親が言うには、それこそ赤ん坊の頃からなにかを見ていたようだった。

突然笑い、なにかに手を伸ばしたり。一才にもなれば、身体を震わせて怯え、火がついたように泣き叫ぶ事もあったようだ。

年齢を重ねるにつれ、泣く事は少なくなつたが、今でもおかしいモノが見えるというのは変わらない。家族は、最初はとまどつたようだったが、今では氣遣つてくれている。

大事にしてきている家族を、気味悪がらせたくなくて。五郎は物心ついた頃から、見た時には黙っている事が多くなっていた。

そうすれば、向こうも気づかない事もある。という事が分かってきてもいた。

見えない、聞こえない、分からない。そう呪文のように心の中で

繰り返す。

「五郎。五郎や、ちよいとで良いのじゃ。聞いてはもらえんか」

その呪文を打ち消すのん気な声が真後ろでして、あまりの近さに五郎は飛び上がって驚いた。

周りを見たが、収穫の終わった田んぼが続く道から、民家は遠く、五郎の不自然な動きに気がついた者はいない。

ひとつため息を吐き、背後の足元に目をやった。

茶色の子犬が、縄とともに五郎のふくらはぎを咬みつくと同時にであった。

悲鳴をあげて足を持ち上げると、子犬は両前足を上げ、一丁前に飛びかかる仕草をする。

「どうどう！ なかなかの暴れ馬じゃ。調教のしがいがあるわい」
「なんの用だよ。ついてくるな」

「儂が追いかけさせたわけではないわ。馬がおまえを追いたがったまでじゃ」

「……どうせ家じゃ飼えないんだ」

「ではその代わりに、儂の頼みを聞いてくれんか」

「いやだよ。関係ないじゃないか」

子犬に気をつけて、歩きだす。

楽しそうに飛び跳ねて追いかけてくる子犬に、子分が出来た気持ちで胸が軽くなった。

ゆるやかに曲がる道を進めば、民家が近づき、子供たちの笑い声が聞こえてくる。

途端に五郎の足取りは重くなったが、歩みを止めれば、足元にまとわりついてくる子犬に、足首を咬まれかねない。

前方に、十にも満たない少年たちが、細い棒きれを刀の代わりに振り回し、また笑いあっていた。

「あ、五郎だ！ 化け物五郎だ、みんな逃げろ！」

少年たちの一人が五郎に気付き、そう言えば、わあっと声を上げ楽しそうに駆け去っていく。

五郎は、唇を噛み、膝丈ほどの薄汚れた鶯色の着物を握りしめた。
「気にするな。短い道しか歩めん奴らじゃ」

しゃがれた声が、足元から聞こえた。

おまえたちからしたら、誰もが短いだろう。と言いかけて、やめる。

「おまえがいるからだ。どつか、行けよ」

「なんじゃ、あんなガキどもの言う事なんぞ気にするのか？ 仕方がないのう、少し離れてやろうか。ほれ、走らんか」

犬の首元がさわりと動いた。小さな翁が、細縄を手綱の如く扱う。首を縄で叩かれ、遊ぶのだと勘違いした子犬は、その縄を噛もうと身をよじった。

「これ！ 馬よ、神妙にせぬか！」

「こいつを馬にするなよ。おまえだけ、どっか行け」

「年寄りを、そう邪険にするもんじゃないぞ」

「いつからの年寄りなんだよ！」

思わず声を荒げれば、民家の軒先で柿を吊るしていた近所の女性が、驚いて目を丸くした。

「あ、なんでもないです」

顔を真っ赤にして、五郎はその場を走り去る。

子犬も獲物を追うように、彼を追いかけて、息を切らして立ち止まった五郎の太ももに、そのままの勢いで頭からぶつかり、ころがった。

「やれやれ。暴れ馬にもほどがあるわい」

「……おまえみたいのが来るから、おれは化け物って言われるんだ」

「だれにも言わなければよかう？ 五郎は気にしすぎるだけじゃ」
起き上がった子犬の身体に跳び乗り、小さな翁は肩をすくめて見せた。話に興味がないとばかりに、細いスネにじゃれつき、細く鋭い歯で攻撃をしかけてくる子犬の顔をつかみ、五郎は、痛い。と注意を与える。

顔が近づいたのが嬉しかったのか、子犬は五郎の鼻をひと舐めし、

また咬みつこうと口を開けた。

やめろ、と声をかけてから手を離して避ける。

民家の通りを出来る限り避け、川沿いの土手を、寄り道でもするかのように草むらに足を踏み入れた。枯れ草が足を包み込み、寒さが少しだけ和らいだ気がした。

「最近の奴らは、自らの貧しさにかまけて、供えることも忘れておる。嘆かわしいことじゃ」

大げさに声を上げる翁に答えず、五郎は枯れ草を蹴り散らす。

「人間にしたら、ひと舐めもせんくらいの酒で構わぬというのに。しみつたれとる」

「役人に頼めばいいじゃないか。根こそぎ奪ってるのは、あいつらだ」

「儂が見える奴がいると思って声をかけても、なんもせん。祠だけ建てて、祈りだけ捧げれば良いとでも思っておるのか。時が過ぎれば、こんなものかのう」

「なにが言いたいんだ」

「やっと聞く気になったか。お供えじゃ。山の中腹辺りに祠があるじゃろう？」

「……どんぐりくらいだったら、拾っておいてやってもいいけど」
「しみつたれとるが、仕方のない事かのう」

小さな翁が、大きく頭を振った。

話の内容から、酒が欲しいのだろう。とは、簡単に予測がついたが、家には物が余っているわけではない。

どちらかといえば、今日明日食べる物にも困っているくらいなのだ。

疲れたのか、子犬が唐突に倒れこみ、翁はひらりと跳んで避ける。仕方なく抱き上げれば、小さな翁は五郎の細い肩に跳び移った。

「のう、五郎や。おまえの先生に頼んでくれてもいいんじゃないかのう」

「先生まで巻き込むなんて、出来るもんか！ やれる物なんて、なにもないよ。それに、静かにしてれば、いつか化け物なんて言われ

なくなる。いつか、おまえたちだつて、見えなくなる」

うつむいて、八つ当たりをするように、枯れ草をまた蹴り散らした。

「ああ、つまらぬ。つまらぬのう」

翁は白いあごひげをなで、五郎の腕に抱かれ、上下する柔らかい背中に跳び移った。

先生

五郎の家から正反対にある村外れ、鮮やかな椿を咲かせる一軒家に足を向けていた。

先生と呼び、文字を教えてもらっている、いつの間にか住み着いていた若い男の家だ。

庵には、彼一人で住んでいるようで、まるで隠遁者だった。

しかし、暗い所がなく気さくで、外れ者にされている五郎にも、隔てなく接してくれている。

門などはなく、綺麗に刈りそろえられた生垣の切れ間から、そつと中をうかがう。

美しい紅色の着物を身につけた可愛らしい少女が、鈴の鳴るような声で歌い、それに合わせて鮮やかな黄色の毬をついている。

ふと、歌がやみ、小気味良く地面を叩く音も消えた。

「誰か、いるの？」

澄んだ声が聞こえ、五郎は首をすくめた。

「ほう、五郎の想い人かの」

「うつうつるさいっ！ 静かにしてろよ」

「ほうほう、見目麗しい女子じゃ。五郎より三つ年下というところかの」

黙らせようと手を伸ばすが、翁は身軽に跳ね逃げる。

頭の上で騒がれたからか、子犬は大きく身じろいで五郎の腕からすり抜けた。敷地へと走り去る子犬を追うように目を向ければ、生垣からおかつぱ頭がのぞいている。

情けない悲鳴を上げて、五郎は尻餅をつけば、少女は目を丸くしてから、口元を押さえて笑った。

「大丈夫？」

「こ、これくらい、平気だ」

「そう？」

白く小さな手が五郎の前に差し出されたが、頼る事も出来ずに慌てて立ち上がる。

「あの子犬、あなたの？」

「そ、そう。あ、いや野良犬。さっき見つけたんだ」

「そう」

ここ五日ほど、彼女を見かけてはいたが、声をかけられずにいた。少しのきっかけで話せるようになるのかと、五郎は子犬に心から感謝した。

「おれ、文字が書けないし読めなくて。でも、寺子屋で学問出来るお金もないし。ここの先生が、本を読みに来ていいって言ってくれて。それで、その先生に文字を教わってるんだ」

言わなくてもいいことを、言ってしまった気もするが、五郎はなんとか話を続けようと必死だった。

「そうなの。文字を教わるって、楽しい？」

「すごく難しいけど、知らない事を知る事が出来るって、すごい事なんだと思うよ。おれは楽しいけど、父ちゃんは農作業には必要ないって言うんだ」

「そう、でも楽しいのね。わたしも……あ、そろそろ行かなくちゃ」

「もう帰るの？」

「うん。いろいろ聞かせてくれて、ありがとう」

黄色の毬を両手で抱え、ほほえんだ少女は生垣の向こうに消える。名前を聞くのを忘れた事に気づき、五郎が慌てて後を追った。

「ねえ！ 名前……」

生垣に囲まれた一軒家。さっきの今であるのに、少女の姿はなかった。隠れる場所は縁側の下くらいしかなさそうだというのに。

まさかという気持ちだが、脳裏によぎる。一軒家の引き戸が開いた。「なんのお構いも出来ず、申し訳ない」

背の高く若い男が、有無を言わさぬ笑顔で、侍姿の男たちを、庵のような家から追い出した。

しかし、難しい顔をした一人が彼に向き直る。

「……本当に、御館様の助けとなつてはくれませぬか」

「何度言われても、辞退するほかありません」

「この村に戦禍が及ぶとも限らないのですぞ」

「そうなたら、逃げるしかありません」

「御館様を、裏切るおつもりか！」

三者三様、なんとか食らいつこうと粘っているが、家人は軽やかに笑った。

「裏切るとは、面白い事を。私がどうして御館様の下から離れる事になったか、お忘れか？」

「そ、それは……」

「私が戻るなど、それこそ御館様は許されまい。独断で来られたそうだが。あなた方は、ここには来られなかった。お早く戻られよ」
三人の男たちの背後に、黒い影のような揺らめくなにかを五郎は見た。

時折、あぜ道などで手招きしているようにも見える黒い影を見かけるが、それよりもはるかに邪悪に感じ、五郎は垣根に身を隠す。

先生が、斬り殺される。

そう思ったが、五郎に助ける術はない。

親兄弟に知らせようにも、距離が離れ過ぎている。村の人間は話も聞かず、五郎をただ煙たがるだけだろう。ただ、震えるしか出来ない。

緊迫した空気は、家人のなんでも言つような言葉で破かれた。

「斬捨てたくば、そうなされば良い。生き恥を晒す。御館様が私を生かす理由は、ただそれだけだ」

「私が、伊秀殿^{いしゅう}を斬るなどと。本当にそう思われるのか」

「もとより腹を切るべき人間なのだ」

「……失礼する」

一人が背を向ければ、二人も苦しそうな表情を見せつつ、伊秀と呼ばれた男に頭を下げ、足早に去っていく。

彼らの背中を眺め、伊秀は目を閉じた。

はじめに浮かんだのは、自分が幼い頃見た屈託のない兄の笑顔。どうしてこんな事になってしまったのか、考えても詮無き事ではあるが、頭によぎるのは見た事もない澱んだ眼で、伊秀を見下すその姿だった――

――伊秀がまだ十にも満たない年の頃である。

たつぷりと墨を含ませた筆をにぎり、紙に向かっていれば、足音荒く兄が踏み込んできた。いつもの事に別段驚く事もせず、腕を無理矢理引つ張られる前に、筆を置いていた。

なりませぬ。と言う書の師匠の言葉も聞かず、兄はよく自分を連れ出してくれたものだ。

八つも年が離れれば、酷い喧嘩に発展する事もなく、体の良い遊び相手として引き回される。

棒を持たされては、剣術を叩き込まれた。泣き言を発すれば、なお打たれた。

將軍の息子として、生きなければならぬのに、そんな事でどうする。と、厳しい顔をして見せながら、傷の手当をしてくれもした。年がゆけば父の側近どもからの重圧も大きくなる。おまえも例外ではないのだ。と口にし、手当ての仕方くらい覚えろと、傷口を叩いて快活に笑った。

戯言を言い合ったり、釜から手づかみで飯を食った事もある。

そんな兄は父の側近たちにも、臆せず間違っていると口を出し、反発する事もしばしばで。それであっても、他方からの意見に耳を傾ける度量もあり、慕われていた。

その兄が、豹変した。

半月ほど前から、伊秀を疎み遠ざけていたのは知っている。

父が隠居し、兄が城主となってからでも、鷹狩りや遠乗りに同行させてくれていたが、その頃はまだ平常であつたと思う。

伊秀にも部下がいたが、一人が他から聞いた話によれば、新しくついた傍仕えが伊秀の事を不穩分子ではないかと吹き込んでいた。問題はない、と思っていたし、部下にもそう言った。

食い下がる部下に、あの兄が狂言に惑わされるわけがなかうと笑った。

しかし、事態は思いがけないほうに転がっていく。

自室の前の庭で、刀を振っている時だった。

武装した男たちが踏み入り、取り押さえられたのだ。何かと問えば、秀介殿しゅうけいの命である。と告げられた。

それでも、理不尽を嫌う兄に潔白を示せば、必ず解放されるだろう。そう信じていた。

大人しく従ったため、縄をかけられる事はなかった。

おしらずで裁きを受けるのかと思っていたが、連行されたのは、兄の自室である。

彼の前で身形みなりを正し、まっすぐ見つめる。

他の側近がいる前では、出来ぬ事だった。兄と自分だけの時に、礼はいらぬ。と言われていた。

目の前にいる秀介は、一目見て異変を感じるほど、眼が落ち窪んでいた。顔色は悪く、少し線も細くなっている。

どうしたのか、と眼だけで問うたが、異様に光る鋭い眼には怒りしか浮かんでいない。

「おまえを謀反むほんの罪で、民に落とす事に決まった」

彼の口から発せられた言葉は、伊秀の耳を疑うほどだった。

だが、いつものおふざけとは違うのだろう。それほどに秀介の声は硬く、悔恨の情をも滲にじませていた。

「何故だ、伊秀。おまえには特別目をかけていた。それが、何故に俺を裏切った」

「私は、兄上を尊敬し支える事にこそ、喜びを覚えております。反乱など、あろうはずがございませぬ」

「証拠は、あがっておるのだ。伊秀、これ以上、俺を怒らせるな」

「あるはずがない、としか申せませぬ。私は潔白です。兄上は、ずっと私という人間を見てこられた。それを疑うと申されますか」

静かに、しかしまっすぐ秀介を見つめた。

彼も眼を逸らす事はない。ただ、悔恨の情を浮かべていた顔は、嫌悪に歪んでいった。

「本来ならば、腹を斬れと言うべき所だ」

「兄上が、斬れと申されるのであれば」

そこで、伊秀は頭を下げた。兄が本当に謀反だと思うなら、たとえ伊秀であれ、この場で斬られていてもおかしくはないはずだった。秀介は目を逸らす。斬れ、という言葉を食べ込み込んだ。秀介の態度は、まさしくそれであつた――

――笑われるべきは、自分の方であつたのか。

伊秀は、ゆっくりと目を開けた。

眼前に三人の姿はなかったが、垣根に誰かがぶつかったように、音をたて揺れた。

のぞけば、五郎が半分垣根に埋まっている。伊秀はおもわず顔を綻ばせた。

「五郎だったか。外で声がしたから、だれかと思えば。今日は書でもしようかと思っていたのだが、君もするかい？」

「あ、あの……」

「さきほどの連中なら、気にする事はない。前に、過去は捨ててきたと言つたろう？」

「先生は、ここにいてくれるんですか？」

よつぽど硬い表情をしていたのか、伊秀は苦笑しながらもうなずいた。

「私は、死ぬまでここにいるしかないのだよ」

「それは……おれも一緒だろうけど」

冷たい風が二人を包み、薄着の五郎は大きく身震いをした。さわりと優しい音をたて、大きな椿が揺れている。

少女の事を思い出し、五郎は伊秀を見上げた。

なにを言えはいいのか、考える。敷地で遊んでいたのだから、知り合いなのかもしれない。

しかし、まだ二十を少し過ぎたばかりの年齢で、ほぼ隠居のような生活をしている先生にまで、化け物と言われなくなかった。表には出していないが、兄のように慕ってもいた。

見つめたまま、動かなくなった五郎の小さな瞳を、伊秀がのぞきこむ。

「どうした？」

「あ、いえ。なんでもありません。お邪魔してもいいんですか？」

「もちろんだ。入りなさい、囲炉裏で手足を温めるといい」

「そつえば、犬が……」

五郎が見回すと、細綱をくわえた子犬は先生にじゃれついてから、五郎の足元に駆けてきた。

それを見て、背の高い彼は、楽しそうに笑う。

「へえ、なつっこいな」

「でも、おれの家じゃ飼えなくて」

「私が……いや、飼えないな。誰か飼える者を探してみよう」

「探してくれるんですか？」

「二人で探すのだ」

伊秀が子犬を抱き上げ、細縄を口からはずしてやるが、首元で引っかかっているようだった。背中側を見たが、縄の端は短毛に埋もれていて、判断がつかない。

眉間にしわを寄せ、引っ張っている間に、子犬は細縄をくわえ直して得意げな顔をしていた。

さりげなく、五郎は伊秀から子犬を受け取る。

「……でも、おれは村の人たちと話せないから」

「いじめか」

「でも、理由はおれの側にあつて。時間をかけるしかなくて」

からかいの言葉をかけてきても、五郎に直接手出しをしてくる者

はいない。

ただ嫌われているわけではない。恐れられてもいるのだ。

曖昧に笑って見せた五郎に、伊秀はなんにも言わず、小さな頭をなでてやった。

骨ばった背を押し、土間に子犬をおろさせて、足を洗う水を用意する。

手拭いを渡してやって、火の入った囲炉裏のそばに五郎を座らせた。

胡坐あぐらをかき、伊秀が緩やかな雰囲気で座っているにもかかわらず、室内の空気は凜と張り詰めたものがある。

いつもうるさい小さな者たちの姿や、声すらも聞こえてはこない。五郎にとって静寂は、この場所にしかない。

しばらく足を温めていた五郎が居住まいを正し、正面に座った伊秀を、まっすぐ見た。

「先生、おれ強くなりたい。一人でも、生きていけるくらい」

「そうか。ならば多くの人に会い、多くの書を読み、多くを学ぶしかない」

「そうじゃなくて。先生が刀を持っている事は知っています。おれに、剣術を教えてくださいませんか」

「農家の息子が、なにを言っている」

「自分で身を守るのなら、農家だろうと関係ないじゃないですか」

「傷つけるだけの力など、本当の強さではない」

「それでも、大事な誰かは、守れる」

「誰のために、誰を殺す」

伊秀の鋭い眼差しに、五郎は言葉を詰まらせた。

握りしめた小さな拳を見て、伊秀は言葉を和らげて、強張った細い肩に手を乗せる。

「大切な者を守るために、誰かを殺す。というのは押し付けに過ぎない。誰のためでなく、結局は自分のために過ぎないのだ」

「それは、でも……」

「良いか。剣術の道というのは、自身を鍛えるためにある。国の戦はともかく、技をひけらかし簡単に振りかざして良いものではない」
「おれは、振りかざすお侍しか、知りません」

「私もここに来るまで、多く見てきたよ。こんなにも外が腐っていたとは、正直驚いた。人間というのは、欲に惑わされやすい。思慮狭き者が多過ぎるのだ。心豊かになるには、学をもって世を知らねばならない。これからの時代、腕がたつだけでは駄目なのだ」

「腕がなければ……」

「己すらも守れない、か？ 確かに道理ではある。だが心が強くあらねば、技は冴える事はない。刀があり、つかみ持ち上げる事が出来るのなら、たとえ赤子であろうと人を斬れる。しかし人を斬った所で、なにも生み出す物はない。一から生み出す事が出来る農民が、どんなに素晴らしく豊かであるか。五郎は、知るべきだ」

言い返そうと口を開けたが、声は出なかった。

唇をかみ、うつむいた五郎から目を離し、伊秀は囲炉裏の炭をかき混ぜた。

外では、まだ風があるのか、葉ずれの音が聞こえてくる。目の前に吊るしてある鉄瓶の湯が、小気味良い音をたてて沸いていた。

伊秀は、ふと口元を緩める。

「しかし、すでに武士とも言えぬ者の言う事だ。武士道とは、はズれた考えでもあるかな」

「でも難しいけど、正しい事を言っているのはわかります」

炭が赤く燃えるのを、五郎も眺めながら、言われた事を心の中で反芻していた。

黒霧

どれくらいの間そうしていたのか、囲炉裏の火がはぜる音がして、五郎は顔を上げた。

伊秀が立ち上がり、襖ふすまを開け、短い木刀を出してくる。

「むやみに振り回さぬと誓うなら、持ち方と振り方は教えよう」

「やった！　ありがとうございます」

「良いか。振るうのは、私の前か、周りに誰もいない時だけだ」

「わかりました。約束します」

嬉々として目を輝かせた五郎を見て、伊秀は笑った。

弟か息子がいたら、こんな感じだったのだろうか。そう思うほど、五郎を気に入っていた。

手渡せば、五郎は飛び上がって喜んだ。

「しかし、教えるのは次に来た時だ。今日は書をやると決めていたから、それは横に置いておきなさい」

「はいっ！」

筆を滑らせはじめた後も、手の届く所に木刀を置いてある五郎。郎の字が大きくなってしまったが、五郎は満足そうだった。

伊秀の手が、筆を握る五郎の小さな手を包み、力強い筆使いで紙に『五郎』と書く。

「字も、釣合いが大切になる。前後の字の大きさを考え、書くと良い」

「字を書くのも、考えないといけないんだ」

「なにごとにおいても、考える事をおろそかにしてはいけない」

小さな声で、はい。と返した五郎は、唇をとがらせて筆に墨をふくませた。

まだ十にも満たない子供なのだ。伊秀は、ほほえましく彼を見つめ、立ち上がる。

土間に顔を出せば、カゴやザル、積んでおいた薪が散乱していた。

子犬を探したが、姿はない。もしやとひっくり返ったカゴを持ち上げれば、子犬は丸くなって寝息をたてている。

「おまえは、気楽だな」

薪を積みなおし、子犬が届かない場所にカゴやザルを置く。

「……聞け、人の子よ」

聞き覚えのない声に、伊秀は瞬時に気を張りつめた。

火掻き棒に手を伸ばし振り返れば、犬がきつちりと座り、伊秀を見つめている。

「人の子よ。儂の声が、聞こえたな？」

立ち去った三人組が、自分を担ごうとしているのではないかと、伊秀はまず疑った。

しかし、声は犬のいる辺りから聞こえてきている。

周囲に気を配りながら、五郎に聞こえないように声をかけた。

「誰だ」

「そんな事は、どうでもいい。おまえ様に頼みがあるのじゃ」

「名も名乗らぬのか」

「どうでもいい事じゃ。この村に、戦禍が及ぼうとしておる。五郎の家の裏山に、祠がある。そこに五郎を連れてきてはくれまいか」

「……五郎、を？」

「そうじゃ。猶予は、あとわずかしかない」

「どうして、五郎なのだ」

「あれは特別じゃ。儂らの姿を見て、声を聞く。あれから出る、気のようなものは、儂らに力を与える。しかし悪いモノからも狙われ、喰われる事からずっと守ってきた」

あれは、知らんがの。と、きよんとした顔のまま、子犬に憑いた何者かが笑う。

伊秀にも、この村に来てから、五郎と村人の間にある違和感は感じていた。

それがなぜだか、村人たちも言葉を濁す為、わかるはずもなかったが、ずれていた考えがしつかりと心にはまり込んだ気がした。

「ならば、そのままおまえたちが守れば良いではないか」

「相手が人間じゃからの。ちょっとしたいたずらならば、問題は無いが。儂らが直接手を下せば、闇に囚われる。そうなれば、五郎を襲う側に立つ事になるのじゃよ」

「村民は、どうなるのだ」

「運が良ければ、生き延びよう。儂にとって、他の人間など……」

「どうでもいい。そう言うのか」

「祀り、崇める事を忘れた人間など、どうでもいい。そう思わんか？」

「思わぬ。神や仏がいるならば、慈悲はあろう」

「逃がしたくば、そうするがいい。五郎を連れた状態で、誰しもが言う事を聞くか。いささか問題はあがあるがのう」

「人間など、どうでもいいと言うのなら。なぜ私に頼むのだ。何者かは知らんが、五郎に直接言えいいではないか」

壁越しにも、人の気配はない。しかし、嫌な予感がした。

予感でしかないものだが、戦の時にしばしば感じていた感覚に似ていた。

多少、混乱する頭を静めながら。伊秀は、話をする事で冷静さを保っていた。

猶予はわずかだと言った声は、それでも焦る様子はなく、のんびりとしている。

「おまえ様に頼むのは、まとっている気が澄んでいるからじゃ。それに、祠の主様にも、おまえ様を連れて来るよう頼まれておる。一度訪れた事があるう？ 氣に入られたのじゃな」

「……断つたら？」

「皆殺しじゃ」

その言葉を聞いた瞬間、伊秀は子犬に向かって、火掻き棒を振り下ろした。

子犬は微動だにしない。際どい所で止めていた。

「貴様らの仕業でか」

「違う。人間どもが山を越えてくる。戦にかこつけて、敗残兵がやったと思わせるようにな」

「……まさか」

「上に立つ者の疑心は、際限ないのう。もう、おまえ様が死ねば済む。という簡単な話では、すでにないのじゃ。五郎を救え」

火掻き棒を下げ、眉間に深いしわが刻まれる。

子犬が立ち上がり、背を向けた。

「さて。急げ、人の子よ。もうそこまで来ているぞ」

なにが、とは聞かなかった。伊秀は、すぐさま五郎を呼び、草鞋わらじを履くよううながす。

次に使う時は、自らの腹を切る時だろう。と思っていた刀を手に取った。

訪れた三人の男たちが、生きてはいないだろう事を、一番に思う。謀反を起こしたわけではなかった。兄である御館様に、楯突いた事すらない。しかし、臣下の戯言を吹き込まれ続け、兄は自分を遠ざけた。

目をかけてくれていた。だからこそ、裏切りという言葉は、酷く兄を歪めたのだろう。

彼らが伊秀を頼って来た事で、疑心が確信に変わってしまったのだろう。

「今更か」

打刀と脇差しを、帯にさす。

物々しい気配に、子犬を抱えた五郎が怯えた目を向けた。

「先生？」

「五郎、木刀は置いていけ。武器を手をしているだけで、狙われかねぬ」

「え……はい、わかりました」

五郎は、水瓶の隣に渋々立てかける。

「良いか、なにがあっても私から離れるな」

「はい」

小さな彼は、多くを聞く事はなく、気丈にもうなずく。

五郎の手には、いつ手折ってきたのか、大きな花を二つつけた椿の枝を持っていた。

伊秀の後に続き、一步外に踏み出せば、五郎は身体を震わせて山の方を見た。

それに気付いたが、伊秀は足早に夕焼けに染まる道をただ進む。

五郎が小走りについて来るのを確認しながら、道沿いの家屋に声をかける。

「逃げよ！ 敗残兵が来る、山の祠まで逃げるのだ！」

驚いて飛び出てくる村の人間たちには、禍々しいほど黒い影に染まっいていく山の姿が見えていない。

伊秀が指をさした山には、誰もいないように見える。

追いついてきた五郎を見て、顔を歪め、村人はぴしゃりと音を立てて戸を閉めた。

「せ、先生！ 敗残兵って？」

「全ては、私のせいなのだ」

なぜ。とは聞かなかった。五郎はただ、まっすぐに伊秀を見つめ、首を横に振った。

「あれは、先生のせいじゃないです。おれ、先に祠に行ってます。だから、先生は村の皆さんをお願いします」

「しかし……」

五郎を守れと言われた事を説明しようとして、言葉を詰まらせる。だが、わかつているとでも言うように、五郎は哀しそうに笑った。子犬が、五郎のあごをなめている。

「大丈夫です。おれには、変なのがついてますから。それに、おれがいたら皆は先生の言う事も信じてくれなくなる」

「駄目だ。私は、五郎を守り連れて行く事を約束したのだ」

しかし、五郎は首を振る。

「ありがとう、先生。変なの言う事、信じてくれて。それなのに、おれをまだ普通に扱ってくれる」

風を切る鋭い音が、頭上を越えていった。

火のついた矢が、茅葺きの屋根に刺さり、あっという間に燃え広がっていく。

「敵襲っ！ 皆の者、祠に逃げよ！」

伊秀が叫びながら、五郎の腕をつかみ走る。

火のついた者は地面に転がらせ、肩から背中にかけて燃え移った火を叩き消した。

百ほどの甲冑を身につけた男たちが、雄叫びを上げ山から姿を現す。

混乱の極みとなった村に、容赦なく襲いかかった。

伊秀は左方からぶつかってくる敵を、刀を抜きざま斬り捨てる。

五郎の目には、伊秀の太刀筋が見えなかった。気がつけば、三人が道に倒れ、包んでいた黒い影が霧散していく。

「走れ！」

その声に、五郎は迷わず全力で走り出した。

囲まれないよう、伊秀が近づく者を斬り伏せながら駆ける。

五郎の家が、みるみるうちに近づき、騒ぎに気付いた両親と兄弟たちが外に出てきていた。

「父ちゃん！ 皆、逃げて！」

何本もの火矢が、二人を狙って射かけられる。

数本の矢は、振り向きざまに伊秀が叩き落していたが、残った数本は家へと向かう。

五郎は目を見開いた。

父親の胸に矢が突き立っていた。燃えながら倒れていく父親に、母親や姉の悲鳴が胸を締めつけた。

家にも火がつき、燃え広がる。

母親が放心したように座り込んでしまったのを、二郎が涙を拭う事をせずに、引き起こそうとしていた。

生きてさえいれば、なんとかなる。二郎の悲痛な呼びかけが続いていた。

忘却の刻

「五郎、止まるな。走るのだ」

硬い表情で、背を押してくる伊秀に従い、五郎は空ろな心のまま、ただ足を動かす。

二十ほどの武者が、追ってきていた。

舌打ちをして、伊秀が振り返り、彼らを阻む。母親を妹のゆきに任せ、二郎が五郎のもとに駆け寄った。子犬が五郎の腕からすり抜け、裏山の方へと走っていく。

「火をつけるとは。なんの罪もない民を、残さず殲滅^{せんめつ}させるつもりか！ 伊秀一人の首だけでは、足りぬのか！」

一本道の、坂の上で伊秀が刀を構えた。
数十歩先で、兵が足を止める。

「御館様の命である！ 即刻、武装を解き、投降されよ」

前に出た男に、伊秀は気迫を込めて、言葉を返す。

縄を打つとは言わなかった。捕らえられた直後に、首を打たれるだろう。

「火を消し、村から手を引くのであれば」

「反乱軍が潜むとも限らぬ。全て焼き尽くし、殺し尽くす事が御館様のお考えであられる。命令は絶対である！」

「反乱軍などない。しかし軍である限り、従うは必然。ならば、立ち合っしかあるまい」

「聞いたか！ 伊秀は謀反を起こした！ 切り捨てよ！」

隊の将を斬り伏せたところで、この惨劇は止まらないだろう。
滅ぼし尽くす事こそが、命令であるからだ。

——五郎が、振り向く。大きく頼もしい背中が、黒い影の塊を塞ぎ止めている。

あるはずもない事に、五郎は息を呑んだ。

しかし、ゆっくりと影が伊秀を押し包んでいくのを見ているしか

ない。

二郎に引つ張られるように走りながら、先生とつぶや呟く。手に、椿の花はない。連れられていた時に、彼の帯に挿しておいたのだ。

伊秀が気を発し、弓を警戒しながら刀を構えた。

雄叫びをあげ、鎧を着けた兵が押し寄せてくる。

いざ踏み出そうとすると、尋常ではない力で帯を引つ張られた。

伏兵がいたのか、と瞬時に脇差しを抜き、後ろに突き出す。なにかに触れた感覚はない。

視線をやれば、美しい着物を着た幼い少女が、左手で帯を引き、右手の人さし指を立てて、口にあてている。

どういう事かと前方に顔を向ければ、そこには黒い影に染まった兵士たちに押し包まれていく自分の姿がある。

自分の戦いを、この眼で見る事が不思議でならなかった。

だが、しばらくは場をもたせられるだろう。振り返れば、少女が椿の枝を差し出していた。

受け取れば、返り血に染まった伊秀の袖を、小さく引つ張った。

「声を出さないで、こちらへ」

本当に幼き者であるのか疑いたくなるほど、少女の歩みは早かった。

全力で駆ける伊秀の、わずか先に行く。やはり人ではない者なのだ、そう思うしかなかった。

森に入り、五郎に追いつけば、彼は少女を見て目を丸くした。

知り合いだったのだろうか。そう思ったが、だいぶ山をのぼった時、手にしていた椿の一輪が、首が落ちるように、そのままの姿で地面に落ちた。

「急いでください。気づかれました」

白い肌が、今では青ざめて見えた。

五郎の背筋に、冷たいものが走る。

二郎に手を引かれたまま、坂の下へ視線を送れば、黒霧が広がり

包まれた木々が立ち枯れし、朽ちていく。

「早く！ 皆、もっと早く！」

悲鳴に近い声で、五郎は叫んだ。

二郎は、その尋常ではない声に視線を下にやったが、のぼつてきた時と変わらぬ光景が広がっている。五郎が、なにに怯えているかわからずにいた。伊秀もさきほど見た、禍々しいほどの黒い物体を見る事は出来なかった。

だが、肌がひりつくほどのなにかが、近づいている事を感じていた。

五郎の叫びを、家族は疑わない。必死に先へと進むしかなかった。やっと、祠が見えた。苔むした小さな祠は、焦りとは無縁のように、静かに佇んでいた。

その前に子犬が立ち、甲高い声で鳴いている。

「五郎、どうするんだ。祠になにがあるんだ」

息を切らせて、二郎が上ずった声を出す。

五郎が伊秀と少女を振り返ったが、二人とも困惑した顔を見せただけだ。

「そうだ、犬！」

叫んで、子犬の背を見たが、小さな翁はそこにいない。

どうして。と、声を絞り出し唇を噛む。

風を切る音が、立て続けに聞こえてくる。

「祠の後ろへ！」

周りの木々に、無数の矢が突き立っていた。

とつさに、ゆきをかばった母親の背にも、二本の矢が突き立っている。崩れ落ちる母親にすぎり、悲鳴をあげたゆきを、二郎が引き剥がした。五郎がゆきの手を取り、二郎は母親を担ぎ上げ、祠の後ろに引つ張っていく。

横向きに寝かせた母親に、五郎が涙を隠そうともせず、顔を近づけた。

「母ちゃん、ごめん。おれが……おれが、こんなだから……」

もはや生きている事が信じられないほど、母親は血の気を失っていた。

だが、震える手で、五郎の顔をなでた。荒れた指先が触れ、五郎は現実なのだと思い知らされる。

「……皆、五郎が大切だから。忘れない、で……」

手が、力尽きて地面に落ちる。

二郎もゆきも、声を出さずに泣いていた。

もう、誰も失いたくはなかった。五郎は祠を叩く。なにか、出てくればいい。

呼んだのは、祠のなにかである事は間違いないのだ。

伊秀は、太い一本の木に背を預け、すすり泣く声を聞いていた。持っていた椿の枝には、一輪の花が残っている。

これを、あの母親が持つてさえいれば。ひよっとしたら——だが、それすらも今更であつた。

彼の元で大きな瞳を向けてくる少女に、伊秀は枝を手渡した。

「援護する。君は五郎のそばにいてやると良い」

「わたしは、五郎から頼まれました。先生を、助けてと」

「私は、すでに助けられた。だから、今度は私から頼んでも構わぬか？」

「……わかりました」

矢の雨がやむのを待ち、木に突き刺さった角度を見て、伊秀はおよその位置を測る。

「走れ！」

少女が枝を抱え、飛び出す。その盾になるように身体を配し、続けざまに襲い来る矢を叩き落した。

「先生！」

少女を祠の裏に引っ張り、五郎が叫べば、伊秀はまた木の陰に身を隠す。

脇腹に、矢を一本受けていた。臓腑は傷ついていないようだったが、しかし、動くには邪魔になる位置でもある。伊秀は冷静に、やじり鏃を

斬り落とし、引き抜いた。袖を破り、きつく締めるように腹に巻く。心配そうにのぞいてくる五郎たちに、口の端を持ち上げ、笑って見せた。

「どうやって、逃がせば良いのか」

物の怪に、騙されたのか。なぜ信用してしまったのか。そんな事を考えている状況でも、すでない。

逃がす人数が、多過ぎるのだ。

考えあぐねている伊秀を、祠の陰から五郎が見ていると、祠の下から辛子色の羽織を着た翁が這い出てくる。

「五郎よ」

「なにしてたんだよ！ 祠に来てやったら、なんとかしてくれよ！」

「頼みがあるのじゃ」

黒霧が、先に迫ってきていた。

そんな悠長な怒鳴りたい気持ちを抑えて、先をうながす。

「早く言えよ」

「五郎、おまえの力を主様にくれぬか。一生を共にすると、誓え」

「……いやだ」

「このままでは、全滅じゃぞ。万が一にも逃れられたとしても、また同じ事が起きよう。これは、五郎の運命じゃ。死ぬまで逃れる事は出来ん。これ以上、大事な人間をおまえのせいで失いたくはないまい」

「やっぱり、おれのせいなんだ」

「それ以外に、なにがある？ 祠から主様を解放するのじゃ。戸のない祠を壊せるのは、おまえの先生しかおらぬ。この祠に供えをし、心から誰かを救おうと考える者にしか出来ぬのじゃ」

「騙してないと、なぜ言える？ おまえが出てこなかったから、先生は傷を負ったんだぞ」

「死に至る傷ではない。五郎が決断するだけで、黒霧を消し去り、全てを解放させる事が出来るのじゃ。大きく見れば、先生も救う事になる。もうこんな惨劇は起きぬのじゃぞ？」

見えない何者かとやりあっている五郎を見て、二郎が腕を引つ張った。

そのまま、どこかに消えてしまいそうだったのだ。

「二郎兄ちゃん？」

「あ、いや。どうした、なにかあったのか？」

「……うん。おれ、なんとか出来るかもしれない」

「先生が、どうにもならない相手なのか？」

「うん。二郎兄ちゃん、ごめん。一郎兄ちゃんたちにも、謝っておいて欲しいんだ」

二郎は、つかんだ手に力を込める。

おかしな弟だったが、嫌いではなかった。こうしてつかんでいても、煙のように消えていく気がした。

動かなくなつた母親を見て、五郎はまた大粒の涙をこぼした。

「おれ、行かなきゃいけないんだ」

「じゃあ、おれがついて行つてやる」

「二郎兄ちゃんは、無理なんだ。おれの、なすべき事だから」

「四郎みたいに、なるんじゃないだろうな」

五郎が生まれた時には、すでに四郎はいなかった。生まれてすぐ、息を引き取つたのだという。

五郎は、首を横に振つた。だが、確信はなかった。

「五郎。私たちじゃ、代わつてあげられないの？」

「うん、駄目みたいなんだ。ありがとう、ゆき姉」

ゆきも、二郎も泣いていた。少女だけが、その光景を大きな瞳に焼き付けていた。

「……いつまでも、一緒にいたかったな」

それだけ呟くと、二郎が弟をきつく抱きしめた。

行きたくないよ。そう二郎にだけ聞こえる声でささやいて、彼から離れる。

少女が、椿の枝を両手で捧げるように、五郎に差し出す。それを受け取つて、五郎は泣きながら笑った。

「名前は、どうでもいいや。おれは、君が好きだった」

「名前は、椿。わたしも、あなたを助きたいほどに」

「……ありがとう」

そう言えば、椿は艶やかに笑った。

着物の袖で顔を拭い、帯に枝を差し込んだ。

祠を、叩く。

「くれてやる。おれが欲しければ、くれてやるから！」

「やめよ！」

突然立ち上がり、声をあげた五郎を、伊秀が一喝する。

恐ろしいほど、近くで遠吠えが聞こえた。

こんな時に、野犬か狼も相手にしなければならぬのか。と伊秀が奥歯を噛みしめる。

「だから！ 皆を助けてくれよ！」

黒霧に声をかけているわけではなかった。祠が雷でも落ちたかのように光り輝く。

「先生、祠を斬ってください！ お願いします！」

伊秀は、それでどうなるのか、わからなかった。立て続けに、わからない事が起こっているのだ。

だが、嫌な感覚は光とともに薄れている。

矢も、やんでいた。

伊秀は息を整え、大きく踏み出し、刀を一閃した。

格子に組まれた骨組みが、下から、斜め上に向かって直線的に斬り離される。

光が、満ち溢れた。

邪悪なものすべてが、洗い流されるように、光の奔流で押し流されていく。

強烈な光の渦の中で、伊秀は獣の唸り声を間近で聞いた。

白い体毛の、見た事もないほどの大きな獣が五郎をくわえ、黒霧を蹴散らし、光の中に消えた。

意識を失っていた伊秀が目覚ませば、祠の後ろで倒れている、二郎とゆきが目に入った。動かない彼らを見て、右手を握りしめた。それで気がつく。刀は握りしめたままだった。兵士の姿は見えない。身体を起こし、脇腹に手をやるが矢傷は塞がっていた。

着物には穴があいており、袖も千切れている事から、夢ではない事は確かである。

「助けられなかったのか」

苦い気持ちで、奥歯を噛みしめた。

だが、二郎たちが身じろいだ事で、二人とも生きている事を知る。なぜ殺しもせず、退却したのかはわからない。記憶が曖昧になっていた。

破壊された祠によりかかり、枝葉の間から少しのぞく夕闇が迫る空を振り仰ぐ。

『二人』を、助けられた。当初の目的は、達成出来たのだ。

伊秀は、安堵し立ち上がる。

いち早く起き上がったいた子犬が、ゆきの細く長い指に咬みついで、悲鳴をあげさせていた。

「無事であつたか」

その様子に気持ちを軽くし、笑いながら二人に手を差し伸べた。恐縮しながらも、二人は伊秀の手をつかむ。

身体に力が入らないようで、足元がふらついてはいたが、二人はなんとか立ち上がった。

伊秀が、彼らの母親に近づき、やじり鍬を落としてから、矢を引き抜いた。

「ありがとうございます、先生。母はここに埋めていこうと思うのですが」

「いいのか？」

「はい。おれたちは森に生かされてます。だから、父ちゃんも近くに埋めようと思います」

「そうか」

壊れた祠の板や柱を、土を掘るのに使おうというのか、ゆきも二郎も手慣れたように作業をはじめた。

伊秀も手伝おうと祠に近づけば、足元の赤い花が目に入る。

椿の花一輪、落ちていた。周辺に、椿の木もなければ、枝すらも見当たらない。

しかし、それを見た伊秀は、酷く心を揺さぶられていた。

大切ななにかを、忘れている。

頭の中が混乱し、思い出そうとすれば、引きつるような痛みさえある。だが絶望という心持ちではなく、浮かんでくるのは切なさ——なぜか、希望だった。

落ちている椿の花に、手を伸ばせば、気がついたゆきが声をかけてくる。

「先生、どうかしたんですか？」

拾い上げた鮮やかな花は、手の中で泣いているようにも見えた。

「もう一人、ここにいなかっただろうか」

そんな事が、あるはずはない。それはわかっているのに、聞かすにはいられなかった。

しかし、ゆきは首をかしげ、不思議そうな顔をしている。

二郎は、一瞬動きを止めたただけだ。すぐに作業をはじめている。

「いいえ、私たちだけでしたけど」

「……そう、だな。おかしな事を」

伊秀は、椿の花を土のかからない脇に置いた。

時間をかけて穴を掘り、埋める。

星がまたたく時間になってしまったが、麓におりても、大変な事態が待っているのだろう。

伊秀は、椿の花を盛り上がった土の上に置き、二人とともに手を合わせた。

風が、森の木々を揺らす。波のような音が、山全体に広がった。
目を開けた伊秀に、椿の花はなにかを語ったように、土の上でく
るりと回った。

だが、それだけだ。

伊秀は、背を向けた。風が切なく悲痛な声をあげながら、三人の
髪や着物を揺らす。

大切ななにかを、忘れてしまった。

その事だけは忘れまい。伊秀は一步、暗闇に包まれた山道へと踏
み出した。

忘却の刻（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました！

そして、和風小説企画を主催してくださった、伊那さまに感謝です。企画参加がなかったら、和物はなかなか書かなかったかもしれません。

和風っぽいものになっていると感じていただけたら、嬉しいです。

他の作者さまの作品は、こちらから♪

和風小説企画 <http://wafukikaku.web.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9016u/>

忘れられた者たち

2011年7月28日03時30分発行